

清初文人姜実節の生涯とその文学藝術

大木 康

発端

二〇一七年に上梓した拙著『蘇州花街散歩 山塘街の物語』（汲古書院）の中で、清の姜実節の「野芳浜」詩を引用した。蘇州の色街の一つである山塘の中心ともいえる野芳浜（冶坊浜ともいう）を詠じた詩である。

野芳浜口南頭岸 野芳浜口 南頭の岸

君住紅闌第幾橋 君は紅闌第幾橋に住む

此日相思不相見 此の日 相思へども相見ず

小楼春望雨瀟瀟 小楼 春望 雨瀟瀟



野芳浜口の南側の岸、君が住むのは赤い欄干のいくつ目のところなのだろうか。会いたい思いがつのるが、今日では会えなかった。小さな高殿に春の雨がしとしと降る日。あの人がいる方を見やるばかり。野芳浜には多くの妓楼が立ち並んでいた。いかにも山塘の色町にふさわしい、ものおもわしげな詩である。

山塘という土地を主人公にした前著では、この詩の作者である姜美節について深入りせず、この詩を引用するにとどまっていた。⁽¹⁾

その後、この姜美節の「秋江垂釣」と題する山水画を目にし、心ひかれるものがあった(図)。画面の左から右へ川が流れている。おそらくは画面左奥の高い山の方から流れてくるのである。川の向こう岸には大きな岩山がそびえ、その頂に亭があり、ふもとには樹木も見える。右手遙か彼方には山影が望まれる。川のこちら側、左手には小さな林があり、川に船を浮かべて、船の上では一人の隠者然とした人物が釣り糸を垂れている。遠景に左右の山、中景に岩山、近景に川と手前の岸辺、釣船という構図である。画面の右上には、

秋江垂釣

意不在魚 意は魚に在らず

安用綸鉤 安んぞ綸鉤を用ひん

烟波無際 烟波 際無く

渺然孤舟 渺然たり 孤舟

蘋花秋風 蘋花 秋風

与之沈浮 之と沈浮す

共我睡者 我と共に睡る者は

其惟白鷗 其れ惟だ白鷗のみ

師倪黄二公法 倪（瓚）黄（公望）二公の法を師とす

庚寅九月二日 庚寅九月二日

萊陽姜実節 萊陽姜実節

とあり、「姜実節」と「姜中子」の二棵の印が捺される。庚寅は、康熙四十九年（一七一〇）である。^②

この絵を見たことをきっかけとして、姜実節その人について調べてみると、これはなかなか興味深い人物である。前著の欠を補う意味で、以下に姜実節の生涯について記してみたい。姜実節、字は学在、鶴澗先生と号した。

姜実節その人についての専著專論はないようであるが、謝正光「清初忠君典範之塑造与合流 山東萊陽姜氏行誼考論」（鍾彩鈞・楊晋龍主編『明清文学与思想中之主体意識与社会 學術思想篇』（中央研究院中国文哲研究所 二〇〇四）では、姜実節を含む萊陽姜氏の清初における活動を詳論し、李惠儀「世変与玩物 略論清初文人的審美風尚」（『中国文哲研究集刊』第三十三期 二〇〇八）では、冷士崑「文太史椅為姜仲子賦」詩を例に、彭年、文震孟、汪琬らの手を経て、最後に姜実節の手に渡った文徵明愛用の椅子をめぐる、「前朝遺物」としての椅子を愛玩した清初文人の精神世界が明らかにされている。楊鎔銘の台湾師範大学における修士論文「流寓遺民 明清之際萊陽姜氏之研究（一六〇八〜一七〇九）」（台湾師範大学碩士論文 二〇〇八）の第三章「隱遯不仕」第二節「遺民画士」では、もっぱら姜実節を取り上げている。また、小塚由博「明末清初の記憶と懐旧 余懷と姜垓の交遊を手がかりに」（『大東文化大学中国学論集』三十四 二〇一六）、張宇声『明遺民詩人姜採評伝』（中華書局 二〇一九）でも萊陽姜氏一族に触れている。これらの論文から多くの知識を得たことをはじめに記しておきたい。

一、萊陽姜氏

まずは、姜実節といえは、その父親の姜採、そして叔父にあたる、姜採の弟の姜垓の二人は、明末の清流、明の忠臣として名があり、明朝滅亡後は、蘇州にあって遺民としてその生涯を終えた、当時にあつての名士である。姜採、姜垓兄弟は、山東萊陽の人。先の姜実節の絵にも「萊陽姜実節」と署する通りである。

姜採の伝、「姜貞毅先生伝」は、清初の古文三大家の一人である魏禧が書いている。張潮の『虞初新誌』が、この

魏禧の「姜貞毅先生伝」を第一巻冒頭に置いていることから、この人物に相当な敬意が払われていた様子がうかがえよう。姜琛、姜垓の伝は『明史』卷二五八にも収められている。

姜琛、字は如農。万曆三十五年（一六〇七）の生まれ。崇禎四年（一六三一）の進士。儀真（のちに雍正帝の諱を避けて儀徵）の知県などを経て、崇禎十五年（一四四二）礼科給事中となる。このとき内閣首輔の周延儒をはじめとする多くの頭官を弾劾したことが崇禎帝の逆鱗に触れ、廷杖一百を受け、その後も獄に留め置かれた。崇禎十七年（一六四四）の二月になつてようやく獄から出され、罰として宣州衛（安徽省宣城）に兵士として送られることになった。ところがその翌月、すでに北京を出発していたところで、李自成のために北京が陥落し、宣州に赴けなくなつてしまふ。南京に福王の臨時政府ができた時、赦されてもとの官につけるようになったが、父の姜瀉里の喪にあつていたため、赴かなかつた。山東萊陽にあつた父が亡くなつたのは、侵入してきた清軍の攻撃（いわゆる壬午の役）に殉じたものである。姜瀉里の殉節については、計六奇『明季北略』卷十八「姜瀉里死難」に見える。このとき姜琛はまだ獄につながれており、弟の垓が、自分が代わりに獄につながれることで、葬儀のため兄に萊陽に赴かせてほしいと請うたが、許されなかつた。明王朝滅亡後、しばらくは難を避けて浙東、安徽、またかつて知県をつとめた儀真などを流浪したり、郷里の萊陽に戻つたりした後、主として蘇州で暮らし、康熙十二年（一六七三）蘇州で亡くなつた。子には、長男の安節、次男の実節、さらに妹の倩があつた。³没後の諡は貞毅。

弟の姜垓、字は如須。万曆四十二年（一六一四）の生まれ。崇禎十三年（一六四〇）の進士である。行人司行人となつたが、行人司の役所に前任者の名を記した石碑があり、そこに崔呈秀、阮大鍼（宦官魏忠賢に与した閹党）の名が魏大中（魏忠賢に殺され東林派人士）と並んで刻まれていたのを見て、前二者の名を削り去る旨上奏し、裁可され

た。後に南明の朝廷で、その怨みを含んだ阮大鍼が力を得ると、姜垓を殺そうとしたので、名を変えて寧波に逃げた。南明の崩壊後、やはり蘇州で暮らし、順治十年（一六五三）に亡くなった。没後の諡は貞文。

姜垓については、明末南京の色街秦淮についての記録である余懷の『板橋雜記』巻下に、こんな話が記されている。姜垓は、秦淮の名妓であった李十娘に入れあげ、日々居続けであった。友人の方以智と孫臨の二人が、人も寝静まった深夜に、あたかも盗賊のように、突然李十娘の家の寝室を襲ったのであった。姜垓は跪いて「大王様、命ばかりはお助けください。どうか十娘を傷つけないでやってください」と懇願した。二人は刀を投げ棄てると「三郎さん、ずいぶんあわてなすったね（三郎郎当）」と大笑い。それから盛大な酒盛りになった。「三郎郎当」とは、黄幡綽が唐の玄宗皇帝（玄宗は三男）をからかったことばである（『鶴林玉露』巻六「郎当曲」）。姜垓も三男であった。『板橋雜記』では、このエピソードを紹介した後で、

如須（姜垓）は、世にも稀なすぐれた人物であつて、樊川（杜牧）の真似をし、謝傳（謝安）と同じようなことをしたのは、たまたまなのである。秋風が吹けば忘れられる团扇、掃眉の才子といわれた薛濤に思いを寄せたとしても、煙花に溺れきるような手合いとは比べものにならない。まずは一条を記して、流風の餘韻を存するまでである。⁴

という。杜牧も謝安も、妓女との関連で知られる。秋風团扇は、漢の班婕妤の「怨歌行」に見える。唐代の名妓薛濤は掃眉の才子と称された。こうした風流の側面は、後で触れるように、おいの実節においても見ることができる。

二、姜実節の出生

姜実節は、丁亥の年、すなわち清の順治四年（一六四七）九月十九日に生まれ、己丑の年、康熙四十八年（一七〇九）七月二十五日に亡くなっている。享年六十三。これは冷士嶺「明処士萊陽姜仲子墓表」（『江冷閣文集』続卷上）に見えるので、まずまちがいのないところであろう。

姜実節は、姜琛の側室であった王氏の腹である。姜琛には、もと正妻の董氏があつた。錢澄之の撰になる「前礼科給事中姜貞毅先生元配董孺人遷葬墓誌銘」（『敬亭集』附録）によれば、董氏は萊陽の同郷である直隸保安州学正董応雷の娘として、万曆三十八年（一六一〇）に生まれ、天啓四年（一六二四）十五歳の時、姜琛に嫁し、崇禎六年（一六三三）長男の安節を生む。崇禎十二年（一六三九）の二月五日、この時姜琛は儀真知県をつとめていたが、董氏は儀真で亡くなった。その後、崇禎十四年（一六四一）、棺は萊陽に送られ、埋葬されたのであつた。⁵⁾

後にも触れるように、姜琛は、崇禎帝の逆鱗に触れて杖刑を受けながらも、死罪にならず、宣州に衛士として送られたことに帝の恩を感じ、宣州老兵と号し、宣州の名勝である敬亭山にちなんで、敬亭山人と号していた。姜琛は臨終にあたり二人の息子に、「わたしは先帝の命を奉じて宣州で衛士となつた、死んだらかならず敬亭山の麓に埋葬してもらいたい（吾奉先帝命戍宣州、死必葬我敬亭之麓）」（『明史』本伝）と告げた。長子の安節は、実節とともに父の遺体を宣城の敬亭山の麓に埋葬し、祠堂を守つた。その後、夫婦の墓が離ればなれになってしまうことを考え、長男の安節は、康熙二十五年（一六八六）董氏の棺を萊陽から宣城に遷し、姜琛の墓の傍らに改葬したのであつた。⁶⁾ 安

節は、そのまま宣城で暮らすようになるが、父とともに、実の母親の墓を守る意味もあったのである。光緒『宣城県志』卷二十六 寓士には姜琛の伝を掲げ、その末尾に、

息子の安節と実節に命じ、棺をかついで敬亭山麓に埋葬するよう命じ、死んでも命令を違えぬ義を誌そうとしたのである。門人は貞毅先生という私諡を贈った。長男の安節は家を廬墓に移し、そのまま宣城に戸籍を移した。

と記されている。⁽⁸⁾姜安節の妻は、萊陽の同郷で、清の順治四年（一六四七）進士になり、浙江、四川の按察使に至った宋琬の娘ともいう。⁽⁹⁾宋琬は、詩人としても名があり、南施（施閏章）北宋（宋琬）と称された人である。『府君貞毅先生年譜統編』順治十八年の条には、両浙按察使となつてやつてきた宋琬が、姜琛を招こうとしたが、固辞したとの記事もある。

さて、正妻董氏が崇禎十二年（一六三九）に亡くなった二年後の崇禎十四年（一六四一）、姜琛は、側室として王氏を迎えた。王氏は、揚州の塩商であつた王永の娘である。側室とはいえ、実際は後妻である。このとき姜琛は儀貞の知県であつたが、その翌年、礼科給事中として首輔の周延儒らを弾劾したことによつて、杖刑を受け、獄につながる。そして萊陽にあつては、姜琛の父、その四男、姜核の妻ら一族のもの二十四名もが、節に殉じて亡くなった。姜琛は依然として獄にあつたため、その母親や家族は、ひとえに王氏が世話をしたのである。崇禎十七年（一六四四）には、姜琛が宣州に送られることになり、王氏はそれに付き従うが、明王朝の崩壊、続いて、南京の臨

時政府にあつて赦免されるものの、阮大鍼による迫害、さらに南京の政府瓦解後は、清軍の攻撃を避け、各地を逃げ回ったのであつた。

魏禧の撰になる「姜貞毅先生副室王孺人墓誌銘」(『敬亭集』附録)では、姜実節からの聞き書きを記す形で、この間の王氏の苦勞を記している。¹⁰⁾ 南京臨時政府の瓦解後、姜琛一家は浙東の各地を流浪していた。順治三年(一六四六)清軍が浙東に迫ると、天台にあつた姜琛は、母親一人を連れて夜の間に姿を消してしまい、王氏と家人はどうしたらよいかわからなくなってしまう。王氏は、二人の下女趙氏、徐氏と老僕一人を連れて、山奥のあばら家に潜んでいた。後に姜琛の消息を得ると、間道を通つて新安(安徽)に向かおうとした。この時、呉越の間では軍隊が行く手をふさぎ、王氏は趙氏を母、徐氏を姉と呼んで、二鼓(午後十時ごろ)が鳴ると行動し、五鼓(午前五時ごろ)には身をひそめるといった具合に、たいへんな苦勞をなめながら、姜琛のいる新安にたどり着いた。冬には、新安から真州(儀真)に至つた。翌順治四年五月には、再び真州から新安に行き、七月にはまた真州に至り、九月に実節を生んだ。お腹に子を宿しながら、幾千里もの距離を歩き回つたわけである。姜実節は、このような困難な状況の中、儀真で生まれたのであつた。

姜実節の母の王氏は、康熙五年(一六六六)四十歳で亡くなった。魏禧の「姜貞毅先生副室王孺人墓誌銘」によれば、

わたし(魏禧)は壬子(康熙十一年 一六七二)蘇州に客となり、貞毅先生(姜琛)の教えを奉じ、安節、実節兄弟と交わりを結んだ。今年、庚申の年(康熙十九年 一六八〇)、わたしは真州にやってきたが、ちょうど

真州の人士が先生（姜採）の位牌を奉じ、名宦として崇祀しており、安節、実節もいつしよに来ていて、とりわけ親密に集ったのであった。実節は、八月二日に王孺人を蘇州の銅井山の原に埋葬しようとしており、涙を流しながら孺人の苦勞を語り、わたしに幽室の文（墓誌銘）を請うたのであった。⁽¹⁾

として、以下、姜実節の語りを記す形で王孺人の生涯を記している。銅井山は、蘇州西郊、太湖のほとり光福山の近くにある。この文章自体、姜実節の求めに応じて書かれたものである。

長男の姜安節は、父の姜採と母の董孺人の墓を守るために宣州に移住したのに対し、次男の姜実節は、後でも触れる虎丘の二姜先生祠と、さらには母の墓を守る意味で、蘇州に残ったのであろう。

三、明の遺民、孝子として

姜採は臨終の時、二人の息子に、死んだらかならず敬亭山の麓に埋葬してもらいたいと告げた。長子の安節は、父の遺体を宣城の敬亭山の麓に埋葬した後、祠堂を守った。宣城はかつて謝朓が太守をつとめ、その敬亭山は、李白の「独坐敬亭山」詩でも知られる名勝である。弟の実節は蘇州に残り、虎丘の二姜先生祠を守り、その後ろに諫草楼を作って、姜採の崇禎帝への諫言の草稿をおさめ、そこに住んだ。二人とも清の時代の科挙には応じず、姜安節、姜実節の兄弟は、父と同じく明の遺民であり、孝子として知られる。二人は、姜採の没後、『姜貞毅先生輓詩』（北京国家図書館蔵）を編纂刊行し、また姜採みずから順治十六年、五十三歳のところまで作っていた『自訂年譜』に加え

て、その後順治十七年から世を去る康熙十二年までの『府君貞毅先生年譜統編』を合わせ刊行している⁽¹²⁾。これには、「長男安節謹編、次男実節謹訂」と題される。姜安節、姜実節兄弟は、父親の顕彰につとめたのである。

蘇州の虎丘に設けられた二姜先生祠について、顧詒禄『虎邱山志』巻七 祠に、

二姜先生祠は（虎丘の）千人石のそばにある。四賢祠と壁をへだてて給事中の姜垞、行人司の姜垓を祀る。湯文正公斌が建てたものである⁽¹³⁾。

とある。同書に、四賢祠は虎丘白蓮池の傍にあるといい、明の夏原吉、周忱、王恕、海瑞を祀る祠とある。また顧禄『桐橋倚棹録』巻四 祠宇に「二姜先生祠」があり、

二姜先生祠は、白蓮池の東にあり、明の給事中垞と弟の行人垓を祀る。国朝康熙二十四年（一六八五）に巡撫の湯斌が建て、于穎の記がある。今、尚書の晟も合わせ祀られている。按ずるに、垞、字は如農、崇禎朝に給諫の官となり、杖を受け、罰として宣州に流謫され、年六十七にして卒した。貞毅と私諡された。著には『正義集』『自撰年譜』がある。垓、字は如須、行人の官となり、明が亡んで、虎丘に隱棲した。年四十で垞より先に亡くなり、貞文と私諡された。著には『楓林集』がある。晟、字は光宇、杜香と号した。元和（蘇州）の人。乾隆丙戌（三十一年 一七六六）の進士、刑部の官となり、累進して刑部尚書に至る。年八十一にして家で卒した。晟は才ある者を引き立て、清廉潔白人柄であった。著には奏議若干卷がある⁽¹⁴⁾。

とある。姜晟は、姜実節の曾孫にあたる⁽¹⁵⁾。姜琛、姜実節は明の遺民であったが、その末裔は清の科挙に応じて栄達していた。これも明の遺民にしばしば見られることで、冒裏の場合なども同じである⁽¹⁶⁾。また『虎邱山志』の同じ巻に、

姜忠肅公祠は東塔院にある。光祿卿を追贈された姜瀉里を祀る。中に諫草樓があり、上に貞毅公琛の像を懸けている。樓の東偏には嘉魚（湖北）の熊給諫開元の位牌を設け忠肅公と並べて祀っている。また東は思敬居、改過軒、巾箱閣であつて、孝敏公の読書の場所である⁽¹⁷⁾。

とある。孝敏というのが、姜実節の諡号である（『萊陽姜氏族譜』卷四下に「鄉諡孝敏先生」⁽¹⁸⁾）。熊開元は、明の末年、姜琛とともに崇禎帝の逆鱗に触れ杖刑に処せられた人。顧祿『桐橋倚棹錄』の前と同じ巻にも、

姜熊祠は東塔院にあり、明の光祿卿を追贈された姜忠肅公瀉里と熊侍御開元とを祀っている。国朝康熙三十四年、巡撫の宋攀が建て、毛奇齡が記を作つた⁽¹⁹⁾。

と記されている。毛奇齡の記は、「萊陽姜忠肅祠堂碑記」（『西河合集』碑記卷七）である。そこには、

（姜忠肅祠の）後ろに諫草樓があり、まさしく貞毅（姜琛）がのりうつつているものようである。その傍に

部屋があり思敬という。貞毅の仲子（姜実節）がいう。「これはわたしの書齋、居室です。廟を過ぎては敬を思うわけで、思敬の記ももちろんあります。それにわたしは一日として敬亭山を忘れられましょか。（敬亭山は宣州にあり、貞毅はここに葬られている）」康熙二十四年に祠が完成し、越えて三年、貞毅の仲子が事柄を述べ、わたし奇齡にこの記を作ることを嘱したのである。⁽²⁰⁾

とある。「過廟」は『大戴礼記』保傅に「過闕則下、過廟則趨、孝子之道也」、「思敬」は『論語』季子に「言思忠、事思敬」。この毛奇齡の文章も、姜実節の依頼によって書かれたものである。姜実節は、こうした名家たちの文章によっても知られるように、幅広い人間関係を持っていた。張宇声『明遺民詩人姜琛評伝』（中華書局 二〇一九 四三三頁）では、姜実節に豊かな財産があったのではないかと述べている。すべてが金銭によって解決できたとも思われないが、名家たちが姜実節の求めに応じて詩文を書いた背景には、こうした謝礼のこともあったかもしれない。

ここに姜熊祠は「康熙二十四年に祠が完成」とあるが、巡撫の宋犖は、康熙三十一年に蘇州巡撫になっているので、康熙三十四年の誤りであろう。顧禄『桐橋倚棹録』姜熊祠の「康熙三十四年」が正しいようである。

張貞の「虎丘二姜先生祠記」（『杞田集』卷三）に、

両先生が亡くなってから、一時の人士たちで学宮や書院に両先生を祀ろうとする者が、ない年はないほどであった。その土地に官となった者は、両先生の節義を高く認め、みなその求めに応じたのであった。蘇州の人もまた虎丘が天下に仰ぎ見られる場所であり、十分にそこに配される資格があったので、康熙甲子（二十三年）一六

八四)にまた文書をそろえて、鶴澗のほとりに祠を築いて祀ることを有司に請うた。位牌を堂に昇らせる日、老人から子供まで一つまみの香をもって祠の下に拝する者が万の単位にのぼった。わたしはたまたま蘇州をおとずれ、その盛んな様子を親しく目にした。如農先生(姜採)の仲子実節がこのことを記すよう囑したのである。⁽²¹⁾

とあり、この「祠記」も、姜実節の依頼によって書かれたと記されている。康熙二十三年、当局に二姜先生祠を設ける申請をし、翌二十四年にできあがったのである。鶴澗は、『虎邱山志』巻四 山水に、

養鶴澗は白蓮池にある。清遠道士がここで鶴を養ったと伝えられる。僧南印がその上に亭を作った。⁽²²⁾

とある。清遠道士は、唐の顔真卿が虎丘に刻した「清遠道士詩」で知られる。いずれも虎丘の白蓮池の近くである。姜実節の号、鶴澗先生も、ここから来ている。

この二姜先生祠、諫草楼には、多くの人がおとずれ、詩を作っている。例えば、錢澄之『田間詩集』巻二十二「客隱集」の「諫草楼 姜勉中学在為先人如農給諫索題」詩(これには丁巳至己未とあり、おそらく丁巳、康熙十六年一六七七の作)、

先朝直節己千秋 先朝の直節 己に千秋

二諫同時本不謀(同時有熊魚山世称熊姜二諫) 二諫時を同じくし本謀らず(同時に熊魚山有り、世に熊姜二諫

と称す)

拜杖祇知臣職尽 杖を拜して祇だ知る臣職を尽くすを

荷戈真頼聖恩優 戈を荷ひて真に聖恩の優なるに頼る

生棲呉苑人誰問 呉苑に生棲して人誰か問はん

死葬宣城(公戌所) 事始休 死して宣城に葬られ(公の戌所たり) 事始めて休む

疏草未焚中有涙 疏草未だ焚かず 中に涙有り

時間夜雨泣楼頭 時に聞く 夜雨 楼頭に泣くを

といった詩がある。詩題の勉中は、姜安節の字である。⁽²³⁾ ここでも、姜安節、実節兄弟が、錢澄之に詩作を求めたとある。これも父親の顕彰活動の一環である。錢澄之も、明の遺民である。⁽²⁴⁾

『国朝画徵統録』巻上の姜実節の伝には、

晩年、二姜先生祠を虎邱に建て、また諫草楼を祠の後ろに築き、隠棲の場とした。足は市中に入らず、人は鶴澗先生と称した。⁽²⁵⁾

とある。また張符驥の「生壙誌」(『国朝耆献類徵』巻四七一 姜実節)にも、虎丘の諫草楼ができてからは、そちらにこもり、

仲子は笥の皮で作った冠をかぶり、平民の服を着て、どんなときも妻子を城内に行かせたのであった。⁽²⁶⁾

と見え、ずっと虎丘にあって、蘇州の城内に入らなかったとある。儒服を棄てること、足を町中に踏み入れないことは、清初の遺民にしばしば見られる行動であった。明の遺民は、まずは清朝に仕官しない、より具体的には清朝の科挙に応じないことによって、その行動が示されるが、さらには、清の統治機関が置かれる城内に入らないこと（不入城）もまた、遺民の行動パターンの一つであった。王汎森「清初士人的悔罪心態与消極行為」では、こうした行為を彼らの一種の贖罪意識によるものと述べる。⁽²⁷⁾ 明清の交替によって、身近にあった者たちが、節に殉じて亡くなっていた。それに対して、遺民たちは、清に仕えないとはいっても、生き残っていたわけであるし、生き残った以上、強制された清の習俗である弁髪を結っていたことになる。こうした彼らが、一種の後ろめたさを抱きながら暮らしていたことは想像に難くない。姜採が敬亭山への埋葬を望んだのも、そういった心情が背景にあったからであろう。姜実節は、そうした父親の思いを晩年「不入城」の行動によって示したのである。ただ、次節で見ると、姜実節は虎丘に移る以前、蘇州城内にある藝圃で暮らしていたのではあるが。

姜実節には三人の男子、本仔、本仁、本位があり、『萊陽姜氏族譜』卷五下の本仔では「世居蘇州府閶門内藝圃」と記されている。この本仔の孫が、刑部尚書に至った晟である。⁽²⁸⁾

『桐橋倚棹録』卷八 第宅には、

姜行人孩の寓舎は山塘にあり、「山塘小隱」の額をかけていた。孩、字は如須。明が亡んで兄の塚とともに蘇州にやってきて、虎丘の山塘に隱棲し、葉襄、金俊明、任大任などの諸宿老とたがいに行き来した。⁽²⁹⁾

とあり、姜琛の弟の姜孩は山塘に住んでいた。山塘は、蘇州の色街の一つでもあり、ここはある意味、姜孩にふさわしい場所であったかもしれない。

四、藝圃

姜実節の名は、彼が暮らしていた蘇州の名園藝圃の名とともに伝わっている。姜琛は、清のはじめ各地をさまよひ、その後、かつて知県をつとめた儀真に十四年ほど暮らしたが、順治十七年（一六六〇）、蘇州に屋敷を構えることになる。姜安節、姜実節の『府君貞毅先生年譜続編』の「庚子年五十四歳」の条に、

この年、蘇州の鱄諸里に居を下した。数畝の荒園であったが、もとは文相国湛持（文震孟）の別業であった。いくさで被害をうけたままであったのを、すこし修理をして、その廬に東萊草堂と署し、また敬亭山房といった。時に雍耐广（雍熙日）、郝印月、李灌溪、姚侔期、周子佩（周茂蘭）、余澹心（余懷）、徐禎起（徐晟）らの諸公と山水の間で気ままに過(30)したのであった。

とある。現在藝圃の名で蘇州の名園の一つになっている園林は、蘇州の繁華街の一つである閶門からほど遠からぬ文衙巷にある。通りの名である文衙は、文震孟の屋敷であったことにちなむ。藝圃は、もとは蘇州長洲の人袁祖庚の庭園であった。袁祖庚は、嘉靖二十年（一五四一）の進士であり、浙江按察副使に至ったが、四十歳で致仕し、郷里の蘇州に戻って、この庭園を営んだ。醉穎堂といい、門には「城市山林」と掲げてあった。閶門の近くは、蘇州でも指折りの商業地帯、繁華街であり、そこに浮世を離れた庭園を設けたからである。後に、この庭園は、やはり蘇州の人文震孟の手に入る。文震孟は、文徵明の曾孫であり、天啓二年（一六二二）状元及第、官は東閣大学士、すなわち宰相に至った。文震孟の弟が、明末文人趣味の教科書『長物志』を編んだ文震亨である。『長物志』は、園林についての知識を記すが、その手本となったのがこの園であったともいえるであろう。この時点では、園は薬圃といった。姜琛は、この薬圃を入手し、名を頤圃と改める。また後に藝圃となる。

この屋敷を手に入れた時の経緯について、姜琛自身の「頤圃記」（『敬亭集』卷六）には次のように見える。

己亥（順治十六年 一六五九）の夏、戦の気配はやまず（鄭成功の南京攻略）、わたしはよろよろと蘇州に行き、山塘の陋巷に借家住まいをしたが、風教を慕って跡を訪ねようとも、前賢の遺跡を両先生（袁祖庚と文震孟）の末席にうかがおうとも、まったく思っていないかった。友人の芸斎周子が突然ある日契約書を持ってやってきて、わたしにここに住めといったのである。天下のうち求めずに成し遂げられることはみな決まって、天地の気が感じて、心志とびったり合うものであると思う。憲副公（袁祖庚）が四十にして官職をなげうち、禽魚の樂しみにふけたのが、この地であり、署して「城市山林」といったのは、ただ仕官を求めないばかりでなく、

本物の山林に入ること求めなかったのである。相国（文震孟）が門を閉ざして車の轍を掃き清め、隠居して草花を植えたのも、またこの地であって、署して「菜圃」といったのは、ただ三公の榮譽を求めなかったばかりでなく、また平泉の楽しみ（庭園の楽しみ）を求めたわけでもないのである。わたしは周子に謝するすべもないので、あらためて「頤圃」と署することにした。『易』の「頤」には「貞たしければ吉なり」「みずから口実を求む」とある。己に求めて人に求めないのは、両先生が求めずして成したものをこいねがうのであろうか。⁽³¹⁾

この園の仲介をしたのが芸齋周子だとある。芸齋周子は、周茂蘭、字が子佩であり、天啓年間、魏忠賢に殺された周順昌の長子である。⁽³²⁾周順昌は蘇州の人。明末東林以来の人間関係といえよう。

この園につき、まずは魏禧の「敬亭山房記」（『魏叔子文集外篇』巻十六）がある。ここでは、姜埰が、本来衛士として赴くべきであった宣州の敬亭山を慕って敬亭山房と名付けた由来を語り、最後は、

山房はもとより美しい林水であり、以前には文肅公（文震孟）の菜圃であり、さらに前には副使袁公祖庚の酔穎堂であった。三公はいずれも賢人であって、わたしはそれを柳子（柳宗元）が鉅錡潭の西の小丘と出会ったのを賀したことに比すのである。かくして、仲君実節の求めによってこの記を作った。⁽³³⁾

とあり、この文章もまた、姜実節の依頼によって書かれたことが記されている。柳宗元が鉅錡潭の西の小丘と出会ったのを賀したことは、その「鉅錡潭西小丘記」に見える。柳宗元は、この鉅錡潭の西の小丘を安い値段で買ったとい

っており、ここでもそういつた含みがあるのかもしれない。

さらに、この庭園が有名になるのは、汪琬が園記を書き、詩を作ったことにもよる。園記は「姜氏藝圃記」「藝圃後記」(ともに『鈍翁統稿』卷十八)の二篇で、ともに康熙十六年(一六七七)の作とされる。³⁴「姜氏藝圃記」では、

藝圃は、前給事中萊陽姜貞毅先生の僑寓である。わが呉郡(蘇州)の治の西北隅は、もとより商店が立ち並ぶ区域であり、騒がしく狭苦しいところで、住む者はそれを苦にしている。それなのに、この藝圃はそうした中にあって、特に名勝としてその名が知られているのである。³⁵

といったところからはじまり、園内の様子を描き出し、それに続けて、

いま貞毅先生もまた前朝で諫官としてその名を知られ、ここで優雅にのんびり暮らして生涯を終えられた。そしてその二人の息子も読書の好士、風流文雅であって、父親の端緒を受け継ぎ、それをさらに光輝かせている。馬の蹄、車の轍が日夜門に至り、すぐれた賢人と勝境とが、こもこも重きをなしている。四方の騷人墨士が、詩に表現したり絵画にあらわしたりして楽しみ、二十年あまりが経って、ますます盛んであるのも、どうして不思議なことであろうか。³⁶

と、姜安節、姜実節の二人に言及している。姜採がはじめ「葉圃」を求めたのは順治十七年(一六六〇)であるか

ら、康熙十六年（一六七七）は、およそ二十年になる。「藝圃後記」の方では、門を入ったところから、一つ一つ建物や名勝を紹介している。そのいくつかを見ると、

東萊草堂は、圃の主人が賓客に面会する場所である。主人は代々萊陽に住んでおり、蘇州に僑居してもなおその額を存したのは、忘れていないことを示したのである。⁽³⁷⁾

池に面して五楹の間の建物があり、念祖堂という。主人が歳時伏臘（夏の三伏、冬の十二月）に祭祀燕享を行なう場所である。堂の前は広い庭になっており、左の壁に設けられた口から入ると、暘谷書堂、愛蓮窩といい、主人（姜埰）と伯子（姜安節）が講学する場所である。堂の後ろは、四時讀書榭、香草居といい、仲子（姜実節）のかつての塾である。堂の軒に沿って右に行けば、敬亭山房という。主人は思うに、かつて諫官として諫言をしたことによって、宣城に謫戍された。行くことはできなかったが、年を取るに及んで君恩を追懐し、宣城の山の名を取って記したのである。館を紅鵝、軒を六松といい、これも仲子の讀書行吟の場所である。⁽³⁸⁾

真ん中には土を盛って山を作つてある。その頂に登ると、少し平らになっていて、朝爽台という。山麓の水辺には、群峰十数があり、最も高いもので念祖堂と相對しているのは、垂雲峰という。愛蓮窩の向いにある亭は、乳魚亭という。山の西南には、主人がかつて棗の木数本を植えており、左右が軒になっていて、思嗜軒という、伯子（姜安節）がそれを作り、その親を思ったものである。いま伯子と弟は、また改過軒の側を割いて建物を築

き、主人の遺集を収蔵することにし、諫草楼という、ちょうど工事がはじまったところでまだ完成していない³⁹⁾。

といった具合に、その内部の様子、特にそれぞれの建物につけられた名称の由来が詳しく述べられている。藝圃は真ん中に大きな池があるが、乳魚亭で魚を見て楽しんでいたのである。『秋江垂釣』の絵も、こうした場所で構想されたかもしれないと想像するのもなかなか楽しい。「藝圃後記」は次のように締めくくられる。

藝圃の様子はおよそ以上のようである。主人とは誰かといえば、前の記にいう貞毅先生がそれである。藝の文字をその圃につけたのは主人であり、わたしに命じてこの記を書かせたのは仲子である。仲子は名を実節とい、字は学在、その他はみな前の記に記したので、重ねては述べない。⁴⁰⁾

この園記もまた、姜実節の求めによって書かれたと記されている。ここにあるように、東萊草堂は、郷里の萊陽を忘れないために設けた堂であり、念祖堂もまた同じように、その祖を忘れないために設けられている。敬亭山房は、すでに見たように、宣城の敬亭山にちなむ。陽谷書堂、愛蓮窩は、姜埰と姜安節が講学した場所であり、四時読書楽楼、香草居は姜実節の塾であった。陽谷書堂のほかに、廊下を響月と称した。陽谷は日が出る場所、つまり日と月とで、明王朝をあらわす。響月の二字の中にも「明」字があり、朝爽台にも「大明」の文字が隠されている。また、後に虎丘に移される諫草楼も、はじめはここにあったようである。念祖堂については、黄宗羲が「念祖堂記」(『南雷文案』卷二)を書いている。これにもまた、

呉門の周子潔（周茂藻）にはここ十年ばかり会っていないかった。丁巳（康熙十六年 一六七七）の中秋、その一札を得た。それは、姜子学在（姜実節）のために「念祖堂記」を書いてほしいと求めるものであった。念祖堂は、卿壑先生（姜琛）の住まいである。先生は萊陽の人であり、蘇州に僑寓していたが、その本を忘れないために、堂に名づけて記したのである。⁽⁴⁾

とある。周子潔は、周順昌の仲子。黄宗羲の文章もまた、姜実節の求めに応じて書かれている。その末尾は、

この堂は、文文肅（文震孟）が歌い哭いた所である。文肅の後、廢されて厩舎になつていた。厩舎の後、先生によつて開かれた。文肅は烏程（温体仁）に忌まれ、先生は陽羨（周延儒）に陥れられた。亡国の怨みは、二人の宰相が大いに関与しているものであつて、天下の興亡がこの一堂にかかつているといえる。わたしは昔文肅に謁見したことがあり、二度この地に行つたことがある。曲池怪石、鑑賞して去りたいものがあつた。その悲しみはどれほどかわからない。⁽⁴⁾

と結ばれる。黄宗羲も、その父の黄尊素を魏忠賢に殺された東林の清流であり、姜琛父子とは通じるものがあつた。汪琬の「姜氏藝圃記」に、藝圃には賢人たちが日夜おとずれ、四方の騷人墨士が、詩に表現したり絵画にあらわしたりしているとあつた。実際に藝圃を訪れた詩人も多く、藝圃にまつわる詩が多く残されている。

この「藝圃記」をあらわした汪琬に「姜子学在園池」「学在所居即文文肅公葉圃也、感賦二首」「思嗜軒詩」「再題姜氏藝圃」「藝圃十二詠」「藝圃小遊仙六首」「藝圃采蓮曲四解」「藝圃竹枝歌四首」(ともに『鈍翁統稿』卷二)があるが、なかでも藝圃の名所十二箇所を詠じた「藝圃十二詠」は、多くの詩人に唱和されたものである。十二箇所とは、南邨、鶴柴、紅鵝館、乳魚亭、香草居、朝爽台、浴鷗池、度香橋、響月廊、垂雲峰、六松軒、繡仏閣である。例えば、「響月廊」は、

回廊何窈窕 回廊何ぞ窈窕たる

鉤簾夜景清 簾を鉤すれば夜景清し

澹澹露華積 澹澹として露華積もり

迢迢漢影横 迢迢として漢影横たはる

漸見高梧末 漸く見る 高梧の末

徘徊園魄明 徘徊すれば園魄明らかなり

とある。漢影は銀河、園魄は満月。この一首では庚の韻を用い、最後に「明」字を出している。汪琬が「藝圃記」や「藝圃十二詠」を作ったのは、康熙十六年(一六七七)のようであるが、それに続いて、孫枝蔚『溉堂集』続集卷六「藝圃十二詠 有序」がある。その序には、

汪民部茗文（汪琬）が「藝圃記」を作り、それに続けて短詠十二章を作った。その詞はたいへん美しかった。わたしは戊午（康熙十七年 一六七八）五月に蘇州をおとずれ、学在（姜実節）と朝も晩も行き来しあつた。酒を飲みながら、わたしに唱和の詩を作るよう頼んだので、何とか数を合わせたのである。⁴³とある。その「響月廊」詩。

園景夜更佳 園景 夜 更に佳なり

月炤修廊下 月は炤る修廊の下

最憐梧与竹 最も憐れむ梧と竹と

声影俱瀟灑 声影俱に瀟灑

高歌明月前 明月の前に高歌すれば

不少同心者 少なからず 同心の者

そして、これより後、同じ年に藝圃を訪れ、汪琬の詩に唱和したのが、一代の正宗王漁洋であつた。王漁洋の作は、『漁洋統集』卷十一「藝圃雜詠十二首 為萊陽姜学在賦」である。漁洋は、同じ「響月廊」について、このような詩を作っている。

修廊非一曲 修廊 一曲にあらず

窈窕随清樾 窈窕 清樾に随ふ

掃地坐焚香 地を掃ひ 坐して香を焚き

心跡両幽絶 心跡 両ながら幽絶

簌簌風蕭蕭 簌簌 風 蕭蕭

無人見明月 人の明月を見る無し

樾は木陰。簌簌は竹の名。孫氏は姜実節と親密で、ともに月を愛でる心で詠じているのに対し、漁洋の方は、むしろいまは亡き姜採の不在を思う詩になっている。

藝圃詩の唱和はさらに続き、南施北宋といわれる、南施の施閏章に「和藝圃十二詠寄姜仲子学在」(『学餘堂集』詩集卷十三)がある。その序には、

藝圃は、呉門文肅公の旧業であり、萊陽前給諫姜貞毅先生の客舎である。汪鈍翁(汪琬)が学在(姜実節)のために十二詠を作り、王阮亭(王漁洋)がそれに和した詩を見せてくれた。そこでわたしも詩を作つて学在に送ることにする。聞くところによれば、呉湖州園次(呉綺)が一日で詩四十首を留めたそうだが、残念ながら見えない。

とある。呉綺の藝圃の詩は、『林蕙堂全集』卷十八の「藝圃詩為学在賦」であるが、詩集に収められたのは、念祖堂、敬亭山房、六松軒、四時読書楽楼、繡仏閣、紅鵝館、香草居、乳魚亭の八首であり、こちらは七言の律詩であり、スタイルが異なっている。しかし、陳維崧「藝圃詩序」（『陳迦陵儷体文集』卷五）には、「わたしの友人である呉園次（呉綺）が、その書齋（姜実節の藝圃）をたずね、あつという間に詩四十首を賦した。学在（姜実節）はそれを刊行して世に伝えようとし、あわせてわたしに序文を依頼したのである（吾友呉園次過其齋頭、頃刻為賦詩四十首、学在梓而伝之、並属予为序云）」とあり、姜実節は、たしかに呉綺の詩を刊行しようとしていたようである。施閏章に戻れば、その「響月廊」詩。

沈沈松檜冷 沈沈として松檜冷え

颺颺風泉清 颺颺として風泉清し

月涼鶴自警 月涼しく鶴自ら警し

中夜時一鳴 中夜 時に一鳴す

此際倚欄客 此の際 倚欄の客

冷然滄海情 冷然たり滄海の情

こちらは世の転変に思いを致す内容である。施閏章は宣城の人であるので、姜埰とはとりわけ深い結びつきがあったともいえるだろう。同じ題材を詠じていても、それぞれに着眼と気分が異なっているとところがおもしろいが、それ

にしても、みな姜実節との関係からこれらの詩を作っているのであって、その顔の広さはなかなかのものといえるだろう。

なお、藝圃は、姜採に求められる前には、袁祖庚の醉穎堂であり、文震孟の葉圃であったわけだが、醉穎堂にしても、葉圃にしても、それらを詠じた詩が多く作られていた。姜実節は、それら醉穎堂と葉圃を詠じた詩を集めた詩集を入手し、刊行していたようである。その詩集は、現在見られないようであるが、蘇州虎丘の塔影園の主、顧苓の『塔影園集』卷二に、「姜仲子合刻醉穎堂葉圃詩文記」がある。そこには、

先生の仲子（姜実節）は、本を読んで古を懐い、旧聞をあまねく集め、憲副（袁祖庚）の『醉穎堂会記』及び文肅公（文震孟）の『葉圃雜詩』を手に入れ、それを合刻し、東萊草堂の故実を明らかにして、わたしに頼んで記を作らせたのである。⁽⁴⁵⁾

とあり、

世の君子は、その詩文を読んで、その世を論じ、その人を知る。とすれば、東萊草堂が葉圃と異なり、葉圃が醉穎堂と異なっているのは、世である。醉穎堂が葉圃と同じであり、葉圃が東萊草堂と同じなのは、人である。⁽⁴⁶⁾ 仲子がこの本を刻したのは、ただ単に詩文のためだけであろうか。

の語で結んでいる。

藝圃については、藝圃を描いた絵画も知られる。清初四王の一人王翬に「姜貞毅藝圃図」があったことが知られている。⁽⁴⁷⁾しかし、藝圃の絵はさまざまあったようで、百年の後も、王鳴盛「題藝圃図冊後」(『春融堂集』巻四十五)がある。蘇州の人である王鳴盛は、若いころ、友人たちと閭門のあたりを歩いていて姜採の藝圃と姜実節の作った諫草楼を思い、「肅然として敬を起こし、徘徊俯仰、去ること能わず」であつたと記している。その藝圃を描いた絵を見て書いたのが、この文章である。姜採その人と藝圃とは、いつまでも蘇州の人々の思い出に残っていたようである。なお、藝圃は現在修復され、世界文化遺産に登録されている。

五、詩詞

姜実節は、当時の文人の常として詩を作り、書画の作がある。そして、とりわけ画家として名があつたといえるだろう。『国朝画徵統録』巻上の姜実節の伝には、「詩に工み、書画を善くす(工詩善書画)」とあつた。姜実節には『焚餘草』と題する詩集があつたようだが、これは伝わらない。⁽⁴⁸⁾現在見られるのは、『鶴澗先生遺詩』『鶴澗先生遺詩補遺』であり、これは羅振玉の編にかかる(『雪堂叢刻』所収)。「遺詩」の羅振玉跋には次のようにいう。

鶴澗先生の画跡は、孤潔冷雋で、倪雲林(倪瓚)の跡を継ぎ、詩もまた清迥絶俗、その人となりのようである。その息子が編んだ『焚餘艸』というのを二十年ばかりさがしているが、なかなか手に入らない。そして『国

朝詩別裁集』『山左詩鈔』『江蘇詩徵』のような総集に選ばれているものは、わずか数篇しかなく、それが逸して久しいことがわかるのである。今年の春、上海にあって、先生の書画冊を売りたいというものがあり、遺詩十餘章を記録することができた。(日本京都の)東山の寓廬に帰って、また荷物をほどこいて自分が持っていた先生の画跡を出し、それに諸家の選んだものを合わせて、前後総計四十九篇の詩を得た、また豹の一斑をうかがうことができるであろう。先生の平生の行誼に至っては、諸家の記述は相当簡単で、その生卒の年月を載せているものもない。卷中「游堯峰」詩の序と張符驤が作った先生の「生壙記」に拠って、わが朝の順治四年丁亥の年に生まれたことがわかった。明の世を距たること数年である。先人の訓を守り、清朝に仕えぬ節義を高く持ち、父母がまだ合葬されていないことから、自ら生壙を営み、あえて妻といっしょに埋葬されないようにした。また卷中の「由木瀆入崇禎橋」「贈戴南枝」などの諸篇を読むと、家国の痛みが、白首となっても新たであったことがわかる。かの龔鼎孳や錢謙益などように朝祿をはみ、名は当代に満ちながら、一旦世の中が変われば、ことごとくその平生の声望を失なうものなど、先生と比べれば、恥じて死なないでいられるだろうか。集録が終ったので、謹んで巻尾に書し、その気高い徳を記すのである。宣統甲寅、後学上虞羅振玉東山寓居の洗耳池に記す。⁽⁴⁹⁾

羅振玉は、ここで宣統甲寅としているが、実は宣統甲寅は、一九一四年であって、民国三年にあたる。このとき羅振玉は日本の京都に亡命してきており、「東山寓居の洗耳池」とあるのは、その浄土寺の寓居のことである。⁽⁵⁰⁾ 羅振玉は、ほかにも明の遺民徐枋の年譜である『徐侯齋先生年譜』を編んでおり、清初における明の遺民には関心を抱いていたようである。羅振玉が、清の遺民として清室を思う心についてわたりはなかったのかもしれない。最後に「満州国」

と関わりを持ったがために漢奸扱いになってしまったのは皮肉としかいいようがない。

『遺詩』には四十九首を収め、その後乙酉の年（民国三十四年 一九四五）の識語を附す『補遺』には、十三首が収められている。⁽⁵¹⁾ 羅振玉が、「家国の痛み」といつていた「由木瀆入崇禎橋」「贈戴南枝」二首を見よう。

由木瀆入崇禎橋

黄葉吹残晚寂寥 黄葉 吹残して晩に寂寥

疏楊木瀆水蕭蕭 疏楊の木瀆 水蕭蕭

驚心忽下天涯淚 驚心 忽ち下る 天涯の涙

猶有崇禎往日橋 猶ほ有り 崇禎 往日の橋

崇禎橋は、蘇州西南に位置する木瀆鎮にあつたようである。あたかも草木黄落する秋の季節。明の世は過ぎ去つたものの、そこに残る崇禎橋の名に涙したのである。

虎丘贈山陰戴南枝

四海都成戰伐塵 四海 都て戦伐の塵と成り

家山回首各沾巾 家山 回首すれば 各巾を沾す

月明夜静千人石 月明らかに 夜静けし 千人石

只有酸心兩個人 只だ有り 酸心 兩個の人

戴南枝は、山陰（紹興）の人、戴易。四海すべてが戦乱の巷と化し、ともに故郷を離れている二人が虎丘の千人石でさやかな月をながめている。「酸心」という言葉は、古い用例がないわけではないが、どちらかといえば俗語的ないい方であろう。ここではかえって、二人の心のありさまにぴったりの表現となっているようだ。姜実節には『酸心集』という集があったともいう。

姜実節の遺詩には、また羅振玉がいうように、題画の詩も多い。「仿倪高士山水並附小詩」。

浅草沙汀路 浅草 沙汀の路

無人屣步還 人の屣歩して還る無し

白鷗多謝汝 白鷗 汝に多謝せん

同我看青山 我と同一青山を看るに

などは、季節こそちがえ、先の「秋江垂釣」の題辞「共我睡者 其惟白鷗（我と共に睡る者は 其れ惟だ白鷗のみ）」などに通じるものがある。

姜実節の遺詩で、さらに注目すべきは、妓女を詠じた詩も見られる点である。「贈女校書張憶娘」詩。

六年前見傾城色 六年前に見る 傾城の色

猶是雲英未嫁身 猶ほ是れ雲英未だ嫁せざるの身

今日相逢重問姓 今日 相逢ひて 重ねて姓を問ふ

座中愁殺白頭人 座中 白頭の人を愁殺す

雲英未だ嫁さずとは、『唐詩紀事』卷六十九に見える、羅隱の故事。羅隱がかつて会ったことのある鍾陵の妓女雲英に、まだ科挙に合格できないのか、とからかわれた時、答えて作った詩の「我未成名君未嫁（我未だ名を成さず君未だ嫁さず）」にもとづく。この姜実節の詩は、『国朝詩別裁集』卷二十一に収められ、そこでは「題簪花図」と題し、詩の後に、

これは歌者張乙娘の肖像である。蔣繡毅（蔣深）が楊子鶴に囑して描かせたもの。当時詩を賦するものが多かった。濃纖肥膩、独り作者盛衰の感が、一座を傾倒させたのであった。⁽⁵²⁾

とある。この「簪花図」については、袁枚『小倉山房詩集』卷七にも「題張憶娘簪花図 並序」があり、張憶娘は康熙年間のはじめ、蘇州で色藝ともに当時の色街におけるトップであり、蔣繡毅が「簪花図」を作って、尤侗、汪士鋐、惠士奇らの名士が詩を題した。ほどなく、この絵が誰かに盗まれてしまい、探し求めたところ、揚州の大商人の元にあるとわかり、蔣繡毅は、ほかの絵とかえて取り戻した。袁枚は後にその絵を見て、この詩を作ったという。羅

振玉の『鶴澗先生遺詩』では、題を「贈女校書張憶娘」とし、題下に、

この詩は、また「張憶娘簪花図」の巻中にも題されている。図巻はいま粵中の辛氏の所蔵であるが、ここではやはり手稿原題のまま記すことにする⁽⁵³⁾。

とある。粵中の辛氏とは、清末広東の賞鑑家として知られる辛耀文であろう。この図に題された詩は、江標によって集められ、『張憶娘簪華図巻題詠』（『靈鶴閣叢書』所収）によって見ることが出来る。ここには、「是日即席又贈一首」と題して姜実節のこの詩を収めている。「萊陽姜実節」と署し、「萊陽主人」「行雲流水」「十年一覺揚州夢」の印が捺されていたとある。

『桐橋倚棹録』巻五「冢墓の「萊陽処士姜実節墓」では、「詩は劍南（陸游）を宗とし、画は雲林を師とす（詩宗劍南、画師雲林）」とある⁽⁵⁴⁾。

姜実節の詞については、蔣景祁『瑤華集』巻五に、「虞美人 卞園早梅」「臨江仙 紀遊」の二首が収められる⁽⁵⁵⁾。『明詞綜』巻九にも収められる「臨江仙 紀遊」を見よう。

夢斷羅幃春睡淺

小樓風竹頻敲

溪流一曲抹山腰

雨香初払柳

日氣漸烘桃

笑解金龜同買醉

故人雅集今宵

鬪詩量酒興還饒

曉鐘齊女墓

殘月大姑橋

「旅の思い出」とでもいった詞である。薄絹のとばりの内、春の睡りは浅く、夢もとだえた。この小楼を風に揺れる竹がしきりにたたく。山の麓を溪流がめぐっている。雨あがりの香りが柳を払い、日の光が桃の花を暖める。

笑って金龜を酒に換えてともに酔いを買う（賀知章が金龜を酒に換えて李白をもてなした）。今宵、友人たちの優雅な集まり。詩を作り酒を飲み、興趣あふれる。楽しんでいて、齊女の墓（常熟虞山にある）に暁の鐘を聞きもしたし、大姑橋（萊州にあった）で残月をながめもした。あちらでもこちらでも、夜を日についての雅会であった。

詞については、当時の名だたる詞作者たちが姜実節に詞を寄せている。朱彝尊の『曝書亭詞』には、「満庭芳 宣德窯青花脂粉箱為萊陽姜学在賦」が収められる。

朱彝尊のは詞であるが、この姜実節が蔵していた「宣德窯青花脂粉箱」については、呉綺「姜仲子宣德窯脂粉箱題

詞」〔林蕙堂全集〕卷十）、汪琬「宣德窰脂粉箱歌並序」〔鈍翁統稿〕卷二）、毛奇齡「宣德窰青花脂粉箱歌 為萊陽姜仲子賦」〔西河合集〕七言古詩卷九）などがある。これについては前掲李惠儀論文でも触れられている。

ほかに、余懷の『玉琴齋詞』に、「鳳皇台上憶吹簫 送姜學在游金陵和顧庵」、陳維崧『迦陵詞全集』に、「菩薩蠻 吳門將歸為姜學在題歲寒圖」（卷二）、「山花子 送姜學在由吳門之宛陵清明掃墓」（卷三）、「滿庭芳 咏宣德窰青花脂粉箱為萊陽姜學在賦」（卷十三）、「金菊對芙蓉 姜學在自宛陵掃墓歸停舟過訪即送其返吳門」などがある。

六、書画

姜実節の名は、当時、あるいは現在も、画家として最もよく知られているかもしれない。絵画に関する記録の中に、その名をしばしば見ることができ。例えば、これまでにも何度か引用した『国朝画徵統録』卷上や『国朝画識』卷四、『歷代画史彙伝』卷三十ほか画家の伝記集に、姜実節の伝が立てられる。また、『呉越所見書画録』卷五の「明季姜学在水墨雲壑高居図立軸」、「桐陰論画」卷下などの、絵画評の書にも、その作品が記録されている。秦祖永『桐陰論画』卷下では、姜実節を「逸品」として、

姜学在実節。山水は倪雲林の法を学び、筆遣い超雋であり、呉下の人は最も尊重した。わたしは尺幅数種を見ながら、峰巒は簡淡、林木は蕭疎、極めて清曠の致を備えていた。しかし、落筆はあまり謹嚴ではなく、処処に荒率の態があつた。思うに、荒率はその長所であり、また短所でもあつたのである。⁵⁶⁾

と述べている。また、先に挙げた陳維崧「菩薩蠻 吳門將婦為姜字在題歲寒図」のように、姜実節の絵画についての詩詞もある。「歳寒図」については、毛奇齡も「題姜実節歳寒図」二首（『西河合集』七言絶句卷七）を作っている。

雪裏尋君統旧欲 雪裏 君を尋ね旧欲を続_く

金昌亭下重盤桓 金昌亭下 重ねて盤桓

相看多少萧条意 相看 多少ぞ萧条の意

恰好題来是歳寒 恰も好し 題し来たれるは是れ歳寒

二

朔風吹雪滿姑蘇 朔風 雪を吹き 姑蘇に満ち

濁酒傾来不用沽 濁酒 傾け来たり 沽_かふを用ひず

松竹院過梅樹下 松竹院に過ぐ 梅樹の下

与君同入歳寒図 君と同に入る 歳寒の図

冬の寒い日に蘇州に姜実節をたずね、酒を酌んで、旧交を温めた。そこで姜実節は、みずから描いた「歳寒図」を示して、詩を題することを求めた。外を見れば、万物蕭条、歳寒の様子である。そして絵もまたちょうど歳寒の図で

ある。歳寒の図には、冬にも変わらない松竹と梅花が描かれていたであろう。自分たちもまた、歳寒図中の人物のようだ、というのである。厲鶚『樊榭山房集』続集卷二詩乙にも、「題姜学在画松 為鮑西園運判作」がある。これも姜実節の松を描いた絵に題した詩である。金昌亭は、まさしく閩門の近くにあり、藝圃からも山塘、虎丘からも遠くはない場所である。

その現在見られる作品についていえば、まずは『敬亭集』の巻首に収められる姜採の肖像である「姜貞毅先生荷戈遺像」がある。そこでは版心に「不孝次男実節泣血敬摹」と記されている。『萊陽姜氏族譜』卷九節義に見える姜採の伝には、「自写荷戈小像（自ら荷戈の小像を写す）」とあるから、もとの図は姜採自身が描いたもののように、姜実節がその図を模したのである。その姿は、遺言にあったように、鎗を持つ宣城の衛士の姿である。これについては、冒襄「題黄門姜如農先生荷戈敬亭図兼呈勉中学在両世兄」（『同人集』卷九）、全祖望「題姜如農侍郎荷戈図」（『鮚埼亭詩集』卷五）などの詩があり、時代は下るが翁方綱「未谷摹姜貞毅敬亭荷戈図属題」（『復初齋詩集』卷三十）、桂馥の「荷戈図跋」（『晚学集』卷三）などもある。

姜実節の絵には、山水が多く、各地のオークションにもときどき出品されているようであるが、所蔵が確実にわかるものについてみれば、「茅亭夕陽図」（重慶三峡博物館蔵）、「雲林遺意図」（四川博物院蔵）、「江南山水図」（東京国立博物館蔵）、「秋山亭子」（上海博物館蔵）、「一壑泉声図」（上海博物館蔵）、また書に「行楷五言詩扇面」（重慶三峡博物館蔵）、「行書七言詩」（重慶三峡博物館蔵）、「草書信札七通」（プリンストン大学蔵）などがある。

その絵には、冒頭で触れた「秋江垂釣」に「師倪黄二法」とあったし、「双峰秀峙図」（北京保利オークション二〇一五年春）に、

倪高士（倪瓚）に、荊浩の「双峰秀峙図」を臨模したものである。姜仲子はまた数百年の後に臨模するのである。萊陽逸士実節⁽⁵⁷⁾。

とあつたりするように、倪瓚、黄公望に学んだものが多いようである。東京国立博物館蔵の「江南半幅」（「江南山水図」）には、

辛未（康熙三十年 一六九一）の仲秋、たまたま西湖から船をうかべて、道中寧市を過ぎ、潯陽に宿泊した。汪氏の主人が紙を出して拙作を求めた。まことにはずかしいのであるが。姜実節⁽⁵⁸⁾。

と題している。「寧市」の「寧」字はいまひとつ明瞭さを欠き、自信がない。寧市を寧国府と解すれば、宣城は寧国府に属するので、杭州から宣城を通って江西の潯陽まで行った時の作ということになる。「江南半幅」は、董源の山水画を、沈周が評したことば。この絵の構図は、董源の「瀟湘図」に通ずるところがある。姜実節が、人から頼まれて絵を描いた様子がうかがわれる。この汪氏が誰であるのかはわからないが、汪といえば、徽州商人の大族の一つであり、その彼らがお金を出して姜実節に絵を描いてもらったのかもしれない。姜実節の場合、あるいは絵を描くことがその収入の一部をなしていたとも考えられる。

七 風流

先に詩詞について見たところで、姜実節の遺詩に、妓女に関わるものがあることに触れた。叔父の姜垓の南京秦淮での話が『板橋雜記』に見えたように、姜実節は、とりわけ妓女陳素素との恋物語が知られている。『詞苑叢談』巻九に次のような逸話が見える。

萊陽姜仲子は、二分明月女子と号した広陵（揚州）の妓陳素素がお気に入りであった。後にさる勢力家が彼女を広陵に連れ帰り、姜はそのために寢食を廢するほどであった。人をつかわし、密かに手紙を送り、結婚したいとの思いを伝えた。陳は使いの者に悲痛な面持ちで、身につけていた金の指輪を断ち切って姜に送り、かならず「還る（環と還は同音）」との意を伝えた。姜はそれを得て、感涙にむせび、友人の呉彤本（呉寿潜）に詞を題するよう求めたのであった。呉は姜のために醉春風一闋を賦したのであった。その詞は、次のようである。

玉甲伝芳信

金縷和香褪

懸知掩淚訴東風

問、問、問

明月誰憐

二分無頼

鎖人方寸

情与長江並

夢向巫山近

好將環字証團圓

認、認、認

有結都開

留糸不斷

些些心印⁽⁵⁹⁾

美しい爪で気持ちを知らせてくれた。あなたの髪の毛の香のする金のひもも。遙かに知る、あなたは涙をおさえ東風に訴えているだろう。たずねる、たずねる、たずねる。明月を誰が憐れんでくれるのか、二分の月があつてもいかなともしようがなく（二人は離ればなれになりいかなともしようがなく）、人の心を鎖す（天下の明月の三分の二は揚州の月が占めるという唐の徐凝の「憶揚州」詩「天下三分明月夜、二分無頼是揚州」の句を踏まえる。またもちろん二分明月女子陳素素）。

思いは長江と同じ、夢は巫山に近い。よかった。環（還）の文字で、いっしょになれることが証された。わかった、わかった、わかった。結び目がみなほどけ、糸（思ひ）は断たれない、わずかばかりでも心が通じ合う。

陳素素は、もともと揚州の人であったのが、ひところ蘇州に来ており、それがまた揚州に連れ去られたものである。冒頭に挙げた「野芳浜」の詩は、彼女が蘇州にいた時に作られたとすれば、それなりに符丁が合う。詞を作った呉寿潜は、呉綺の息子である。

陳素素については、『国朝画識』卷十七に『虎邱綴英志略』から引いた伝が見え、

陳素素は江都（揚州）の人で、自ら二分明月女子と名のつた。萊陽姜学在の姫であった。美しく艶やかで、絵が描け、また歌も上手だった。名流の呉園次（呉綺）、毛西河（毛奇齡）、余淡心（余懷）などの諸公にみな詩がある。好事の者がその事で曲を作り、秦楼月伝奇を作った。⁽⁶¹⁾

とある。その詩集『二分明月集』は、『秦楼月』に附されており、見ることが出来る。この版本には見えないが、呉綺『林蕙堂全集』卷四に「陳素素詩集序」がある。その詩について、

泣くのは窮途のようであり、つまるところ閨房の阮籍であり、知己の弔いを思うところは、女性の虞翻と称されるだろ⁽⁶²⁾う。

と述べている。阮籍は、車を走らせ、道が行き止まりになると泣いたといい、虞翻は、死んだら青蠅くらいしか自分の弔いには来てくれないといった（『三国志』卷五十七 呉書 虞翻伝、裴松之注引『虞翻別伝』）。真娘を弔って詞を作ったことを指そう。趙懷玉『亦有生齋集』詩卷十六には「題二分明月女子陳素墨蘭」詩が収められており、彼女の絵がそれなりに流布していたことが知られる。

陳素素の詩集『二分明月集』には、その詩詞六十首が収められる。なかには、「尋迷樓故址」「二十四橋」「虎丘」「劍池」などのように、揚州、蘇州の名勝を詠じた詩もある。そして、ここに「和天水生見贈韻」「再和天水生見贈韻」「絳紅鵝館贈天水」「再絳紅鵝館贈天水」「送天水遊西湖」「鳳仙花呈天水」「通草花呈天水」「別天水婦訪求二親踪跡」「抵維揚寄天水」「接天水書感賦」「剪指環寄天水」「再接天水書感賦」「端陽前三日接天水書以衣見寄病中不能作答口占」「絶用誌永懷」の各詩は、天水すなわち姜実節に答えた詩である。天水（甘肅省。杜甫の詩で知られるかつての秦州）は姜氏発祥の地であり、ここでは姜実節を指す。そして、陳素素の和詩の多くに姜実節の詩も収めている。例えば、姜実節の詩、

碧水朱欄比画図 碧水朱欄 画図に比す
繁華自古羨江都 繁華 古自り 江都を羨む
阿儂家近蕃釐觀 阿儂 家は近し蕃釐觀
一樹瓊花絶代無 一樹の瓊花 絶代無し

これは、陳素素に会ってはじめのころの詩であろうか。蕃釐觀は揚州の道觀。そこにはみごとな瓊花の木があり、歐陽脩の「瓊花芍藥世に倫無し」（『歐陽文忠公集』外集卷第六「答許允運見寄」）で知られ、宋の徽宗が「蕃釐觀」の扁額を書いた。江都、すなわち揚州のすばらしい風景や蕃釐觀の瓊花のように、あなたは絶世の美女、との挨拶である。揚州は瓊花で知られ、郭明道「揚州瓊花詩詞」（江蘇古籍出版社 二〇〇一）一書もある。それに対して、陳素素の返しは、

臨邛曾愛酒家凶 臨邛 曾て愛す 酒家の凶

得見相如果甚都 見るを得たり 相如の果たして甚だ都なるを

豈惜琴心通一笑 豈に惜しまん 琴心一笑を通ずるを

不知曾聘茂陵無 知らず 曾て茂陵に聘せらるるや無きやを

ここでは司馬相如と卓文君の故事を用いて答えている。臨邛の富豪の娘であった卓文君は、司馬相如のうるわしい姿（『史記』司馬相如伝に「甚都」）を見、その琴の音にひかれて駆け落ちし、後に臨邛の町に戻って二人で酒家を開いた。相如は、後に文学の才を買われて武帝に召し出された。すてきなあなたを見て感激しました。あなたが琴を弾いたなら、どうして一笑を惜しましましょう。いっしょに酒家を開くのもいいですわ。それにしても、あなたは天子からお招きをいただいているのではないですか、と答えたわけである。

それから「別天水帰訪求二親踪跡」「抵維揚寄天水」の二首は、果たして豪族に連れ去られたかどうかはわからない

いが、蘇州から一度揚州に戻った時の詩であろう。この二首の間にある「澹関泣別」も、蘇州郊外の澹墅関まで見送られた時の作であろう。「覓二親踪跡不可得感傷而作」は、揚州での作である。そして、「接天水書感賦」「剪指環寄天水」は、揚州で姜実節の手紙を読み、指輪を送った時の詩であろう。「剪指環寄天水」は、

佩帶金環記有年 金環を佩帶し 記す 年有り

一朝伝語寄郎前 一朝 語を伝へ 郎の前に寄す

困樂不是艱難事 困樂は是れ艱難の事ならず

只要郎心金様堅 只だ要す 郎心の金様に堅きを

長年身につけていた金の指輪を、自分の気持ちを伝える言葉としてあなたにお届けします。いっしょになるのなど簡単。あなたの気持ちが金のように堅ければいいのです。

そうしたやりとりを含んだ詩集である。この詩集にはさらに後ろに「名媛題詠」として、この詩集を読んだ多くの女性詩人たちの詩を収めているが、中には戯曲の『秦楼月』を読んでの作も含まれているので、まずは先に『秦楼月』伝奇を見てみよう。^(註)

『秦楼月』は、蘇州の朱素臣の作。一九二六年に陶湘輯『喜咏軒叢書』甲編に影印されている。また、呉梅、王孝慈の手を経て、現在北京の国家図書館に蔵される本が、『古本戯曲叢刊』三集に影印され、さらに二〇一六年に文物出版社から影印本が出されている。北京国家図書館本には『二分明月集』も附されている。なぜか『古本戯曲叢刊』

の影印本には見えないのだが、北京国家図書館本には封面があり、「呉門朱素臣編 秦樓月 二分明月女子集附 文喜堂梓行」とある。はじめに「蕊栖居士呉綺紅鵝館に題す」とする呉綺の序がある。紅鵝館は、藝圃の中の建物であり、呉綺には姜実節の伝である「紅鵝生小伝」がある（『林蕙堂全集』巻十二）。序に続いて、呉綺の散曲「題情」を収めている。「天水生の事に感じ、戯れに為に代わりて賦す（感天水生事、戯為代賦）」とある。実は、この『秦樓月』の中に、呉綺自身をモデルにした袁武子なる人物が登場する。自分が登場する戯曲を見て、序文を書き、散曲を作っているところがおもしろい。この散曲の末尾に、呉梅の自筆で「辛亥冬仲読蘭次曲即書秦樓月卷首」として七言絶句二首が記される。さらにその後ろには、「二十二年九月卅日潞河孝慈王立承識」とする王孝慈の識語がある。続いて「新編秦樓月目錄」。さらに「二分明月女子小照」陳素素の肖像があり、「七十五叟顧雲臣摹 鮑承勳鐫」とあって後溪菊人の題詩がある。続けて六葉の挿絵があり、それぞれに題詩がある。最初の図の版心に「旌德鮑承勳刻」とある。最初の図の題詩は「呉下悔庵題」とする七言絶句。悔庵は尤侗である。第二図には「右調相見歡 伊人書於梅花樓」とある。伊人は、顧湄。第三図には「右調長相思 其年氏題」とある。其年は陳維崧である。これには版心に「鮑天錫刻」とある。第四図は「蜀眉山鈍老」の七言絶句。「鮑天錫鐫」。第五図は「広霞山人書於衣香閣上」と題する七言絶句。広霞山人は余懷。「鮑天錫鐫」。第六図は「右調鵲橋仙 笠翁」とあり、李漁である。「旌臣鮑承勳刻」。このように当時の有名人たちが詩詞を寄せているのである。旌徳は、安徽寧国府の県。宣城に近い場所である。『姜貞毅先生輓章』に収める「姜貞毅先生荷戈遺像」の版心にも「不孝次男実節泣血敬摹／旌徳鮑守業字承勳拜鐫」とあった。

巻首には「秦樓月卷上 苴庵伝奇第十五種」「呉門朱素臣編次 湖上李笠翁評閱」とある。本文には評点が施さ

れ、眉欄に評語がある。『秦楼月』は上下二巻に分かれ、上巻、下巻にそれぞれ十四齣、合わせて二十八齣からなる戯曲である。話のあらましは、以下のようである。

主人公の呂貫が登場して自己紹介をし、「わたしは呂貫、字を儀生といい、萊陽の人である。父親は、黄門を拝し、直諫によって、その賢きさまが競うように伝えられている（小生呂貫、字儀生、萊陽人也。先君拜黄門、直諫争伝鳴鳳）」という。そしてまた、いま蘇州に住んでいるというところなど、実名でこそないものの、姜実節がモデルであることをぼやかそうとの意図はほとんど感じられない。太公望呂尚は、姜子牙とも称され、呂と姜とのつながりがあり、貫は実（實）からうかんむりを取った文字である。呂貫はまだ結婚しておらず、妻を求めているところだという。物語は、その呂貫が、呉興太守として赴任途上の袁皓、字は武子と蘇州で会うところからはじまる。袁皓は呉綺である。呉綺の字は園次であり、武袁子とすれば、音が近いのである。呉綺は実際湖州の知府になっており、劇中の呉興太守とも合っている。

女主人公の陳素素が蘇州虎丘の真娘の墓をたずね、彼女を弔い、一詞を題する。その詞は、『二分明月集』にも収められている「秦楼月」である。劇の題名もここから来ている。陳素素など実名である。その詞は、次のものである。

香紅歌

青山一閉無年月

無年月

松枯柏老同心難結

天公不管花如雪

消磨鶯燕憑誰說

憑誰說

秋烟秋雨幾堆黃葉

赤く香しい花も終わってしまい、青山（お墓）がひとたび閉じてから、どれだけの月日が経っただろうか。どれだけの月日が経っただろうか。松は枯れ、柏は老いて、同心結びも結びがたい。

天公は花が雪のように消えてしまうのもお構いなしなのだろうか。鶯や燕（妓女）をいじめるのを誰に訴えたらいいのか。誰に訴えたらよいか。秋のもやと雨の下、真娘のお墓はほとんど黄葉に埋もれてしまいそうなのに。

呂貫が虎丘の真娘の墓をおとずれ、陳素素の詞を読んで心ひかれ、下僕に命じてその作者である陳素素をさがさせるがみつからない。劉岳將軍が蘇州の妓女の花案（コンテスト）を主催する。そこにいた呂貫は、真娘の墓で見た詞を紹介し、この詞を作った陳素素こそが一番であるべきと主張する。そこで劉岳將軍が陳素素を探すよう命じ、ついに素素を探し出し、呂生と陳素素を会わせてやる。

すぐに思いを通じた二人であり、劉岳將軍は、ただちに枕席をすすめるが、呂貫は、きちんと礼に則って結婚したいといい、一方の素素は身分のちがいを思い、ためらっている。呂貫の僕人である許秀は、いまは学問に身を入れる

時と呂貫を諫める。

そうこうしているうちに、素素は山族の王虎にさらわれ、太湖の山寨に連れ去られてしまい、王虎の妻になるよう迫られるが、肯わない。王虎らは、呉興城を攻撃する。太守の袁皓は、城が危ういとみて、みずから縛につき、自分の命とひきかえに城の人々を守ろうとする。許秀は山寨に潜入し、素素が貞節を守っている様子に心をうたれ、二人をいっしょにさせてやろうと決意し、劉岳將軍に知らせる。劉將軍は山寨を攻め、山賊たちを殺して、素素を救い出す。最後には、呂貫は状元及第し、素素と結婚する。

このような物語である。才子が、佳人の書いた詩詞を読んで、思いを寄せる話は、唐の顧況の紅葉題詩の物語（小説として古くは『青瑣高議』前集巻五の「流紅記」、後に戯曲『題紅記』など）があり、それをもとにしているといえるし、女主人公が賊に捕らえられているのを、主人公の知り合いである將軍が助けるのは『西廂記』であろう。『秦樓月』第一齣「情概」に「紅鵝別伝郵筒寄、事堪崔氏春秋配」とあり、「紅鵝別伝」（姜実節と陳素素の物語）が、「崔氏春秋」（『西廂記』）と一対になるであろうといっている。素素が山寨で貞節を守るところは、望まない客に身受けされることを拒み、みずから命を絶った真娘を下敷きにしていてもいえるだろう。

戯曲の末尾には、「総評」として、女士龔静照と女士王端淑の評語が記されている。王端淑の評語は、次のようであり、その感動のポイントがわかる。

深情宛転、幽意纏綿、あたかも江淹の「恨賦」を読んだかのようで、人をしておのずと涙を流させる。まことに小青（馮小青）のような人物である。真娘を弔う一首の詞については、すでにひさしく人間に伝誦されてお

り、また西陵の蘇小の句（古楽府「蘇小小歌」、また李賀「蘇小小墓」）に相当し、並んで千古に伝わるであろう。読了して讚歎感服した。⁶³

馮小青は明代万曆年間揚州の才女。馮家の妾となったが、正妻にいじめられ、鬱々として亡くなった。『二分明月集』には、当時の女性詩人たちの題詩も収められていて、かなり評判を呼び、作品が早く流伝していた様子がかげえよう。そこには、商景徽（祁彪佳の妻商景蘭の妹）、王端淑（王思任の娘で多くの著作を残した才女）など、名の知られた女性作者たちの作も含まれている。また、華亭の較書、蘇氏は「題秦樓月劇兼以志感」と題する詞を残しており、これは『秦樓月』についての詞である。

『秦樓月』伝奇を通して、姜実節は、こうした風流、艶聞によっても知られているのである。

注（62）郭英徳論文では、この『秦樓月』は、姜実節自身がお金を出して刊刻したものではないかとしている。これまで、姜実節が、多くの名士たちに関連の詩文執筆を依頼していたことを考えると、朱素臣にこの劇作を依頼したのが姜実節自身であった可能性も排除できないと思われる。

結び

以上、清初に生きた姜実節について、孝子、遺民、詩人、画家、また風流などの方向から見えてきた。最後に、その人となりを示す挿話を紹介したい。王暉『今世説』巻七 任誕に見える話である。

姜学在が、かつて旅支度をし、一童子を連れ、商人たちの船について、洞庭の東山に登った。山中には金持ちが多かったが、決して刺を通じようとしなかった。相羊僧寺で、一人の乞食が壁に絶句を題しているのを見、異なるものと思つてその乞食を探させた。探し出すと、まねいて上座に座らせ、いっしょに飲食をした。乞食は誰だか知らず、姜の手をにぎつて、ほんとうに知己のようですよ、といった。姜はかくして大喜びした。⁶⁴

これだけ読むと、姜実節は詩を愛する一種の奇人だったかのようなイメージを結ぶことになるが、実はこの話はより詳しく、李煥章『織水齋集』「洞庭丐者伝」に見える。こちらでは、この乞食が相羊寺の壁に書きつけた詩も収められている。

不信乾坤大 乾坤の大なるを信ぜず

超然世莫群 超然として世 群るる莫し

口吸三峡水 口は三峡の水を吸い

足躡万方雲 足は万方の雲を躡む

有形総是假 形有るは総て是れ假

無象孰為真 象無ければ孰れか真と為さん

悟到無生処 悟りて無生の処に到る

梅花満四隣 梅花 四隣に満つ

(姜美節が)ある日、洞庭の東山に行き、相羊寺に入つて、その詩を見、大いに異として、この乞食を客座に招いて、古今のことを論じた。明末の事に至ると、乞食はたちまち痛哭し、両耳を掩つて、逃げ出していつてしまった。翌日またやってきて、仲子に「あなたは真にわたしを知る人だ」といった。仲子は喜んで、彼と詩を論じたが、きちんと道理が通つていた。⁶⁵

とあつて、ここでも明末の時事が関わつていたことがわかる。姜美節は、先にも、儒服を脱ぎ、筍の皮で作つた冠をかぶつて、変わった姿をしていたとの話があつたが、それも明の遺民としての行動であり、単なる奇行というわけでもなさそうである。

姜美節の肖像は、『呉郡名賢図伝贊』巻十七に見ることができ(図)。これは、蘇州の滄浪亭にある蘇州の五百人の名賢の石刻を本にしたものである。そこには、

忠臣之子 忠臣の子

藝圃流馨 藝圃に馨を流し

身寄虎阜 身は虎阜に寄せ



心依敬亭 心は敬亭に依る

と題されている。ここには風流艶聞の部分がないが、虎丘の周辺が、蘇州の色街であったことを思えば、そうした香りは伝わらないわけではない。姜実節の肖像は、『萊陽姜氏族譜』巻七 遺像にも見え、「孝敏公像賛」として、

富貴を求めず、功名を慕わず。詩は杜老を追い、絵は徵明を軼^おう。竹杖を曳き、若笠を戴し、山の高きを愛し、水の清きを喜^{この}む。斯れ乃ち黃門の仲子、人鶴澗先生と称⁶⁶す。

世愚弟查士標題

とある。查士標はまた明の遺民で画家として知られる人である。

なお、姜実節は、生前に墓を作っていて、その生壙

の記がある。張符驥の「生壙誌」(『国朝耆献類徵』卷四七一 姜実節)である。お墓については、同治『蘇州府志』卷四十九に、次のようにある。

処士姜実節の墓は、養鶴澗の先祠の傍らにあり、みずから「萊陽姜仲子之墓」と題している⁶⁷。

姜実節という人、この人は、まずは孝子として明の忠臣であった父親、姜採の遺言を守り、その顕彰につとめた人である。姜採、姜垓の二人が、今日これだけ知られるのは、やはりその息子たちの積極的な活動があったからといえるだろう。

わたしはかつて、清初、清軍の攻撃を受けながら、明朝への忠節を誓って、明に殉じた嘉定の侯氏一族の侯岐曾の次男である侯涵(侯玄涵)の生涯を綴ったことがある(『明王朝忠烈遺孤侯涵生平考述』『中国文学研究』第二十五号 二〇一五。日本語版は拙著『明清江南社会文化史研究』汲古書院 二〇二〇に収める)。侯涵は、一族の多くが明に殉じて亡くなった後、生き残ったがために、その子孫を守り、女性たちを守り、また家財産を守るため苦労した。侯氏忠烈の偉業は、生き残った侯涵らによって伝えられ、顕彰されたのである。

また、やはり明末清初を生きた冒襄についても、調べたことがある(『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』汲古書院 二〇一〇ほか)。冒襄も、やはり明の遺民として生きた人であるが、この人はまた、董小宛をはじめとする女性たちとの交遊によって知られる「風流遺民」である。侯涵にしても、冒襄にしても、詩文、書画の作があった芸術家であったことはいうまでもない。

ここに取り上げた姜実節も、遺民であり、孝子であり、そして詩人、藝術家であり、そして一方で、風流艶聞で知られる風流遺民の一人ともいえるであろう。姜実節は、ちょうど侯瀚と冒襄の交差したところに位置する人物といえようか。ここにも明の後、清の初めの時代を生きた文人の一つの姿を見ることができようであろう。

《注》

(1) 前著では、徐文高・夏水編注『山塘古詩詞』（上海古籍出版社 二〇〇七）六十ページから引用した。ここでは出処を『姑蘇竹枝詞』と記していた。『姑蘇竹枝詞』は同名の書が何種類かあるが、管見の限り、この一首を収めるものはなかったようである。同治『蘇州府志』卷一五〇「新溼」の条に「新溼在虎邱下塘、今名野芳浜、見姜実節集」として「姜実節詩、野芳浜口南頭岸、君住紅闌第幾橋」の二句を引く。

(2) 姜実節は、実は、庚寅年の前年、康熙四十八年に世を去っていたようである。とすると、庚寅は例えば庚辰などの誤りなのであろうか、あるいはそもそもこの絵自体の素性が怪しいということなのであろうか。

(3) 妹の倩については、その詩が文喜堂刊本『秦樓月』に附された『二分明月集』末尾の「附名媛題詠」中に「天水小姑倩」として見える。『萊陽姜氏族譜』卷四下の姜採のところに「王氏生実節。一女適吳給諫諱适之子」とある。吳适は蘇州の人。

(4) 如須高才曠代、偶效樊川、略同謝傳。秋風团扇、寄興掃眉、非沈瀟煙花之比、聊記一条、以存流風餘韻云爾。

(5) 錢澄之による王氏の墓誌銘は、錢澄之の『田間文集』卷二十三に見える「前給諫姜公卿暨元配董孺人遷葬墓誌銘」のほか、姜採の『敬亭集』附録に収められた「前礼科給事中姜貞毅先生元配董孺人遷葬墓誌銘」もあり、題名をはじめとして、文字に異同がある。董氏の棺を萊陽から宣城に移した時に書かれた墓誌銘であるが、ここでは、姜実節により近い資料とする立場から、『敬亭集』附録のものに拠った。『田間文集』で「弘光即位」と作るのを、『敬亭集』で「弘光帝即位」としていることなどにも、姜安節、実節の思いが込められるのだろうか。

- (6) 『萊陽姜氏族譜』卷八 塋域「江南塋域」には、「賜進士出身札科給事中私諡貞毅先生塚公墓在宣城縣北門外文星團土名趙子崗木塔冲、有碑」また「董孺人墓在公墓左側、有碑」とある。
- (7) 命其子安節実節昇葬敬亭山麓、以志死不違命之義。門人私諡曰貞毅先生。長子安節移家廬墓、遂籍宣城。
- (8) 姜安節の伝は、光緒『宣城県志』卷十六の儒林伝に見える。はじめ王陽明『伝習録』の良知の説を奉じていたが、やがて『孟子』を宗とするようになった。後に宣城の孝子祠に祀られた。光緒『宣城県志』卷三十五 載籍には、「古大学釈、中庸衍義、仰幸録、孝経正義、白雲集 並姜安節著」とある。『萊陽姜氏族譜』卷四下の姜安節のところには「住寧国府。字勉中、号茲山。崇禎癸酉年（崇禎六年 一六三三）生、康熙丁丑年（康熙三十六年 一六九七）卒。享年六十五歳。（中略）私諡孝介先生」云々とある。
- (9) 『府君貞毅先生年譜統編』順治十八年の条には、「同邑宋公荔裳、安節之前婦翁也」と見える。しかし、『萊陽姜氏族譜』卷四下の姜安節には「配張氏朱氏」とある。
- (10) 魏禧による王氏の墓誌銘についても、魏禧の「姜母王少君墓誌銘」（『魏叔子文集外篇』卷十八）のほかに、『敬亭集』附録の「姜貞毅先生副室王孺人墓誌銘」があり、文字に異同がある。ここでも、『敬亭集』に拠った。
- (11) 余於壬子客呉門、獲奉教貞毅先生、与安節、実節兄弟交好。今年庚申、余來真州、值真州人士奉祀名宦、安節、実節偕來、相聚尤密。実節將以八月二日葬孺人於呉門銅井山之原、涕泣道孺人劳苦、乞余為幽室之文。
- (12) 『姜貞毅先生輓詩』は、姜塚没後の顕彰活動をめぐる好資料である。これについては、朱沢宝「明遺民形象重塑的微觀考察——以姜塚為例」（『文学研究』第二卷第二期 二〇一六）で触れるが、筆者も別稿「姜塚の顕彰活動『姜貞毅先生輓章』をめぐって」を、近く『斯文』誌に掲載の予定である。
- (13) 二姜先生祠、在千人石上。四賢祠間壁、祀給事中塚、行人司塚。湯文正公斌建。
- (14) 二姜先生祠、在白蓮池東、祀明給事中塚暨弟行人塚。国朝康熙二十四年巡撫湯斌建、于穎記。今以尚書晟拊。按、塚字如

農、崇禎朝官給諫、被杖戍宣州、年六十七卒、私諡貞毅、著有正義集、自撰年譜。垓字如須、官行人、明亡、隱虎丘、年四十、先採卒、私諡貞文、著有楓林集。晟字光宇、号杜香、元和人。乾隆丙戌進士、分刑部、累遷至刑部尚書、年八十一卒於家。晟愛惜人才、操守廉潔、著有奏議若干卷。

(15) 『萊陽姜氏族譜』卷四下の姜実節には「以曾孫晟爵誥贈光祿大夫刑工兩部尚書、配郭氏誥贈一品夫人」とある。

(16) 拙著『冒襄と『影梅庵憶語』の研究』（汲古書院 二〇一〇）。

(17) 姜忠肅公祠、在東塔院、祀贈光祿卿瀉里。内有諫草樓、上懸貞毅採像、樓之東偏、設嘉魚熊給諫開元位与忠肅公並祀。又東為思敬居、改過軒、巾箱閣、為孝敏公誦書之所。

(18) 『呉郡名賢図伝贊』卷十七の姜実節の条には、「卒之日、呉人諡曰守正」とある。

(19) 姜熊祠、在東塔院、祀明贈光祿卿姜忠肅公瀉里並熊侍御開元。国朝康熙三十四年巡撫宋筮建、毛奇齡記。

(20) 後有諫草樓、則正貞毅所依憑者若。傍有房曰思敬、貞毅之仲子曰、此吾齋居也。過廟思敬、記固有之。且吾敢一日忘敬亭山哉。（敬亭山在宣州、貞毅葬于此。）康熙二十四年祠成、越三年、貞毅之仲子疏所載事而属奇齡為之記。

(21) 両先生没、一時人士請祀学宮、祀書院者、無虚歲。官其地者、高両先生之節、皆從其請。呉人又以虎邱天下具瞻而両先生之德、実足以配之、康熙甲子復合辭請於所司築祠鶴澗上祀之。升主之日、黄髮垂髻拈瓣香拜祠下者以万計。余適遊呉、親炙其盛、如農先生仲子実節属記其事。

(22) 養鶴澗在白蓮池。相伝清遠道士養鶴於此。僧南印作亭其上。

(23) ほかにも呉綺「虎丘姜貞毅先生諫草樓」詩（『林蕙堂全集』卷二十）ほか。

(24) 清水茂「錢澄之の詩」（『日本中国学会創立五十年記念論文集』汲古書院、一九九八）がある。

(25) 晩年建二姜先生祠於虎邱、又築諫草樓於祠後、為棲息所。足不入城市、人称鶴澗先生。

(26) 仲子籀冠袿服、尽遣妻子入城。

- (27) 王汎森「清初士人の悔罪心態与消極行為」(同氏『晚明清初思想十論』復旦大学出版社 二〇〇四)、林宜蓉「舟舫、療疾与救国想像 明清易代文人文化新探」第二章「不入城之旅 明清之際遺民徐枋的身分認同与生命安頓」(万巻楼 二〇一四)。
- (28) 『萊陽姜氏族譜』は清末の光緒十三年(一八八七)に刊行されている。卷六下には、姜美節の後裔として十九世(美節は十二世)の浩祥の名が見え「現居閭門内崇真宮橋思序堂」とあり、その後裔がずっと蘇州の閭門付近に住んでいたことがわかる。
- (29) 姜行人塚寓舎、在山塘、額曰山塘小隱。塚字如須。明亡与兄塚采呉、卜隱虎丘山塘、与葉襄、金俊明、任大任諸宿老相過從。
- (30) 是年、卜居蘇州之鱣諸里。荒園數畝、旧属文相国湛持別業。兵燹之餘、稍加修葺、署其廬曰東萊草堂、又曰敬亭山房。時偕雍耐广、郝印月、李灌溪、姚俎期、周子佩、余澹心、徐禎起諸公放懷山水間。
- (31) 己亥之夏、鼙鼓不靖、余踉蹌適呉、僦山塘之委巷、初不求承風訪蹟、竊芳躅於兩先生之末席。吾友芸齋周子忽一旦操券而至、於我乎処処。余謂凡天下之無所求而為之者、必天地之氣之相感以成其心志之合。憲副四十投簪、耽情禽魚、此一地也、署曰城市山林、是非独不求仕宦也、亦不求必入山林。相国杜門掃軌、屏居蒔植、亦此一地也、署曰葉圃、是非独不求三公之榮也、亦不求平泉之樂。余既無以謝周子、則更署之曰頤圃。在易之頤曰、貞吉、自求口実。夫求諸己而不求於人、庶幾兩先生之無所求而為之者歟。
- (32) 陳斌編校『周順昌研究資料彙編』(蘇州大学出版社 二〇一三)には、この周茂蘭の伝記資料もまとめて収められている。なかには、黄宗羲「周子佩先生墓誌銘」などもある。この人もまた、忠烈の遺児である。
- (33) 山房故美林水、前此為文肅公葉圃、又前此為副使袁公祖庚之醉穎堂。三公者皆賢人、吾將比柳子之賀丘遭也。遂因仲君美節之請為之記。
- (34) 李聖華箋校『汪琬全集箋校』(人民文学出版社 二〇一〇)の箋による。
- (35) 藝圃者、前給事中萊陽姜貞毅先生之僑寓也。吾呉郡治西北隅、固商賈闐闐之区、塵囂湫隘、居者苦之。而茲圃介其間、特以

勝著。

(36) 今貞毅先生、復用先朝名諫官、優游卒歲乎此、而其兩子則以讀書好士、風流爾雅者、紹其緒而光大之。馬踏車輶、日夜到門、高賢勝境、交相為重、何惑乎四方騷人墨士、樂於形諸咏歌、見諸圖繪、訖二十餘年而顧益盛與。

(37) 東萊草堂、圃之主人延見賓客之所也。主人世居於萊、雖僑吳中而猶存其顏、示不忘也。

(38) 面池為屋五楹間、曰念祖堂、主人歲時伏臘、祭祀燕享之所也。堂之前為広庭、左穴垣而入、曰暘谷書堂、曰愛蓮窩、主人伯子講學之所也。堂之後、曰四時讀書榭、曰香草居、則仲子之故塾也。由堂廡迤而右、曰敬亭山房、主人蓋嘗以諫官言事、謫戍宣城、雖未行、及其老而追念君恩、故取宣之山以誌也。館曰紅鵝、軒曰六松、又皆仲子讀書行哦之所也。

(39) 中間墨土為山、登其巔、稍夷曰朝爽台。山麓水涯、群峰十數、最高与念祖堂相向者、曰垂雲峰。有亭直愛蓮窩者、曰乳魚亭。山之西南、主人嘗植棗數株、翼之以軒、曰思嗜、伯子構之、以思其親者也。今伯子与其弟、又将除改過軒之側、築重屋以藏弄主人遺集、曰諫草樓、方鳩工而未落也。

(40) 圃之大凡如此。主人謂誰、前記所謂貞毅先生是也。以藝名其圃者主人、而命予為之記者、仲子也。仲子名実節、字字在、餘悉載前記中、不復著云。

(41) 吳門周子潔、不見者十餘年矣。丁巳中秋、得其一劄、乃為姜子學在求念祖堂記。念祖堂者、卿暨先生之居也。先生家萊陽、僑寓吳門、不忘其本、故名堂以識之。

(42) 斯堂也、為文文肅歌哭之所。文肅之後、廢為馬殿、馬殿之後、辟自先生。文肅為烏程所忌、先生為陽羨所陷、亡国之戚、兩相与有力焉、天下之興亡係於一堂。余昔謁文肅、兩至其地、曲池怪石、低回欣賞、不知其可悲如是也。

(43) 汪民部茗文為作藝圃記、繼以短詠十二章、其詞斐然盛矣。予以戊午五月客吳門、与學在晨夕過從、酒間属予和作、勉如其数。

(44) 藝圃者、吳門文文肅公之旧業、萊陽前給諫姜貞毅先生客舍也。汪鈍翁為姜學在作十二詠、王阮亭見示和章。余亦漫賦簡学

在。聞吳湖州園次一日留詩四十首、恨未即見也。

(45) 先生之仲子、讀書懷古、蒐羅旧聞、得憲副醉穎堂會記及文肅公藥圃雜詩、合刻之、為東萊草堂故實、而屬予為記。

(46) 世之君子、讀其詩文、論其世而知其人、則東萊草堂之異于藥圃、藥圃之異于醉穎堂者、世也。醉穎堂之不異于藥圃、藥圃之不異于東萊草堂者、人也。仲子之是刻也、豈特為詩文已哉。

(47) 一九九八年に北京翰海のオークションに出品されたが、その後についてはわからない。

(48) 民国『萊陽県志』人事志卷三之三 藝文 著述には、「酸心集 佚 焚餘詩草 姜實節著」ともある。

(49) 鶴澗先生画跡、孤潔冷雋、嗣武雲林、詩亦清迥絕俗、如其為人。顧求其嗣子所編所謂焚餘艸者二十年不可得、而總集如国朝詩別裁集、山左詩鈔、江蘇詩徵所選、僅寥寥三數篇、知佚已久矣。今年春在上海、有以先生書画冊乞售者、録得遺詩十餘章。返東山寓廬、又發篋出所藏先生画跡、合以諸家所選、先後共得詩四十九篇、亦可窺豹一斑矣。至先生平生行誼、諸家記述頗略、亦不載其生卒年月。捫卷中游堯峰詩序、及張符驤所作先生生壙記、知實生於我朝順治四年丁亥、距明社之屋已數年矣。顧守先人之訓、高不事之節、以父母未得合葬、自宮生壙、不敢以妻柩。又讀卷中由木瀆入崇禎橋、贈戴南枝諸什、家国之痛、白首如新。彼龔錢輩身食朝祿、名滿当代、一旦桑海改易、則尺喪其平生、以視先生、能無媿死乎。集録既終、謹書卷尾、以誌景行。宣統甲寅、後學上虞羅振玉記於東山寓居之洗耳池。

(50) 錢鷗「京都における羅振玉と王國維の寓居」(『中国文学報』第四十七卷 一九九三)に、「浄土寺の寓居の」庭には小さい池があった。それができあがった時、当時の清史館総裁趙爾巽が史館職の招聘状を送って来たのだが、羅振玉はその書状を焼き、池を「洗耳池」と名付けている」とある。

(51) 羅振玉は、一九四〇年に亡くなっている。識語は「仇亭老民」と題するが、これはたしかに羅振玉の号のようである。「乙酉」がなにかの誤りなのであろうか。

(52) 此歌者張乙娘照。蔣繡穀屬楊子鶴凶之。同時賦詩者多、濃纖肥膩、独作者盛衰之感、尽傾一座。

(53) 此詩亦題張憶娘簪花圖卷中、卷今藏粵中辛氏、茲仍照手稿原題書之。

(54) 羅振玉の『鶴澗先生遺詩』及び同『補遺』には収められなかつた詩もある。汪琬輯『姑蘇楊柳枝詞』に、

霸岸邗溝駢路荒

吳宮煙景亦淒涼

杏垂細雨江南夜

玉笛吹來綵斷腸

また、

華信纔過上戍時

金昌亭下雨糸糸

最能添得離人恨

第一無情是柳枝

の二首を収める。釈達受撰『宝素室金石書画編年録』卷上 道光七年の条に、「萊陽姜仲子詩箋一頁云」として、

柳外移船鏡裡回

茶煙香過興悠哉

賦成秋水能千古

釣起鱸魚儘四腮

遠渚動搖波影亂

空江蕭颯雨声來

七絃揮罷囊琴却

書卷還応次第開

後誌云、萊陽姜実節題於虎邱鶴澗之諫草樓下。歲在癸未十月」とある。癸未は康熙四十二年（一七〇三）。その後には、姜実節の息子である姜本任の「臨江仙」詞を収めている。また、光緒「長汀臬志」卷三十一物産羽族 白頭翁に「姜実節詩」として、

霜鬢逢春可自由

老人端的為多愁

不知小鳥緣何事

也向花前白了頭

とある。

(55) 南京大学中国語言文学系 全清詞編纂研究室編『全清詞 順康卷』第十五册（中華書局 二〇〇二）。

(56) 姜学在実節、山水撫法雲林、涉筆超雋、只下人最重之。余見尺幅數種、峰巒簡淡、林木蕭疎、備極清曠之致。但落筆不甚謹嚴、处处有荒率態。蓋荒率是其所長、亦是其所短耳。

(57) 倪高士有臨荆浩双峰秀峙圖、姜仲子復摹於數百年後。萊陽逸士実節。

(58) 辛未仲秋、偶泛舟西湖、路徑寧市、下榻潯陽。汪氏主人出紙索拙、実有愧也。姜実節。

(59) 萊陽姜仲子、嬖所歆広陵妓陳素素、号二分明月女子。後為豪家携婦広陵、姜為之糜寢食、遣人密致書、通終身之訂。陳対使悲痛、断所帶金指環寄姜、以示必還之意。姜得之、感泣不勝、出索其友吳彤本題詞。只為賦醉春風一闋、其詞曰、玉甲伝芳信。

金縷和香褪。懸知掩淚訴東風、問問問。明月誰憐、二分無頼、鎖人方寸。情与長江並。夢向巫山近。好將環字証團圓、認認認。有結都開、留糸不断、些些心印。

(60) 陳素素、江都人、自名二分明月女子。萊陽姜学在之姬。美而艶、能画又善度曲。名流吳園次、毛西河、余淡心諸公俱有詩。好事者至有譜其事、為秦樓月伝奇。

(61) 泣類窮途、究是閨房之阮籍、弔懷知己、可称巾幗之虞翻。

(62) この「秦楼月」については、吉川幸次郎「鴛鴦繾」 「秦楼月」(「吉川幸次郎全集」第十六卷)もと「支那学」第四卷第三号「新刊紹介」(一九二七)、郭英徳「新戯生成、女性閲読と遺民意識」朱素臣「秦楼月」伝奇写作と刊刻的前因後果」(「戯劇研究」第七期 二〇一一)ほかの論考がある。Waiyee Li, *Women and National Trauma in Late Imperial Chinese Literature*, Harvard-Yenching Institute Monographs, 92, 2014, p.17にも言及がある。

(63) 深情宛転、幽意纏綿、如読江淹恨賦、使人自然涙下、的是小青人物。至其弔真一関、久已伝誦人間、則又当与西陵蘇小之句、並垂千古矣。読竟嘆服。

(64) 姜学在嘗襟被挟一童子、附佔人舟、往登洞庭東山。山中多富人、絶不与通刺。相羊僧寺中、見一丐者題壁絶句、異而物色得之。延置上座、与之共飲食、丐者不知何許人、顧握姜手曰、若真知我者。姜遂大喜。

(65) 一日往洞庭東山、入相羊寺、見其詩大異之、請居客座、論古今事、至明末、丐者忽痛哭掩兩耳走匿出。越日復来、語仲子曰、君真知我。仲子喜与之論詩、井井有理。

(66) 不求富貴、不慕功名。詩追杜老、絵軼徵明。曳竹杖兮戴若笠、愛山高而喜水清。斯乃黃門之仲子、人称鶴澗先生。

(67) 処士姜実節墓、在養鶴澗先祠旁、自題萊陽姜仲子之墓。

『萊陽姜氏族譜』卷四下には「葬虎邱山忠肅公祠及貞毅貞文二公祠之間」とある。

清初文人姜實節的生平及其文學藝術

大木 康

清初文人姜實節是明末清初名士姜埰之子。姜實節的叔父姜垓也是當時的名士。晚明時期，姜埰作為一個言官彈劾了包括宰相周延儒在內的諸多達官，觸碰到崇禎皇帝的逆鱗而被逮捕，不僅受了杖刑，而後更被遣戍宣州衛。不過，因明朝滅亡，姜埰竟不得去宣州。入清後，姜埰度過了明朝的遺民生涯。姜埰去世時留下了這樣的遺言“吾奉先帝命戍宣州，死必葬我敬亭之麓”。姜實節和他的長兄姜安節合力如其言。姜實節還積極奔走讓姜埰能在儀真（姜埰當過知縣）入祠，也在蘇州虎丘興建二姜先生（姜埰、姜垓）祠等。各種顯彰二姜先生的活動，都是他們實行孝道的證明。姜安節私諡孝介，姜實節私諡孝敏，亦由此。

姜實節亦以其詩文書畫聞名。姜實節有詩文集《焚餘草》，今佚。今所存著述有羅振玉所輯《鶴澗先生遺詩》及《鶴澗先生遺詩補遺》。他所居住的蘇州藝圃則是當時的名園，魏禧、王漁洋等諸多名士都曾來到藝圃，以藝圃為題作詩、寫文章。可見姜實節的交遊很廣。姜實節又和當時名妓陳素素多有交流。蘇州戲曲家朱素臣以姜實節和陳素素的故事寫成戲曲《秦樓月》。

姜實節既是孝子，又是詩人畫家，且以風流聞名，可謂是如冒襄一派的明末清初「風流遺民」之一。